



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語ライティングにおけるチャットを活用したプレライティング・ディスカッションの考察：「深い学び」と「協同学習」に焦点を当てて〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	青木, 千加子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	乙第7222号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95265
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	AOKI_Chikako_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：青木 千加子

審査委員	主査	特任教授	河合	靖
	副査	准教授	阿部	真
	副査	立命館大学教授	佐野	愛子

学位論文題名

英語ライティングにおけるチャットを活用した

プレライティング・ディスカッションの考察：

「深い学び」と「協同学習」に焦点を当てて

本研究は、日本人英語学習者を対象に、ライティング学習においてチャットをプランニングとして活用し、プレライティング(W1)からポストライティング(W2)に至る過程での学習者の意識の変化および知識構築のプロセスを、「深い学び」と「協同学習への指向性」に焦点を当てて検討した応用言語学研究である。当該の研究対象分野である日本の英語教育では、学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」が施策用語として登場し、文部科学省は、学習者が協同学習的な手法で主体的に知識を取得し、様々な場面にその知識を転移して問題解決を図るように主導している。しかし、深い学びをどのようにもたらすかに関する実践レベルでの理解・運用は、発展途上の段階と言わざるを得ない。著者は、チャットプログラムを用いて協同学習的な英語ライティングのプランニングを実施し、これによりライティング過程での学習者の意識の変化や知識の構築がどのように起こるかを考察した。

本研究では、コンピュータ支援型協同学習システムを利用してチャットによるプランニング活動をすることで、英語ライティングを進める上で必要な知識の取得（内化）と転用（外化）が具現化され、その過程で学習者は補償ストラテジーや想起ストラテジーなどを用いながら、英語力の高い低いに関係なくライティングの内容や形式の質を向上させ、「主体的・対話的で深い学び」としてのライティング学習が実現していると、著者は主張する。また、質の高い対話により学びが深まり、それがライティングの成果物を向上させている可能性を指摘するとともに、英語力の高低よりも協同学習への指向性がこの影響をより助長する様子を考察している。

口頭試問は 2025 年 1 月 6 日 16 時 30 分から約 1 時間 45 分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約 35 分間論文の内容について発表を行った。次に、審査委員との間で研究の意義、新規性、方法論などの観点から約 30 分間の質疑応答が行われた。その後、約 40 分間審査委員のみで本論文の審査を行った。

質疑応答では、本研究の結果の新規性と意義、背景理論としての認知主義と社会構成主義に対する態度、アクション・リサーチあるいはリフレクティブ・プラクティスとしての研究の可能性、測定時点の設定に起因する限界、測定用具の開発の詳細、協同学習への指向性の教育介入による変化あるいは相互作用の可能性、生成 AI が台頭する教育環境における英語ライティング指導への示唆、英語力とライティング学習に関するビリーフへの対応、チャットを用いた研究のデータ収集方法に関する着眼点、文部科学省の施策用語との関連などの点について質疑応答が行われた。著者からは真摯かつ誠実な態度で回答がなされ、その内容も適切で妥当であった。質疑応答を通して、著者の英語教育とその研究に対する熱意が感じられ、博士論文口頭試問として高い水準であったと判断される。

質疑応答の後、著者本人及び参加者が退出し、審査委員のみによる審査を実施した。審査委員は、次の 3 点で本論文を高く評価し、その意義を認めると判断した。まず、第一に、本研究で「対話の質」や「学びの深さ」の可視化、および発話内容の評価などを行う測定ツールの開発を丁寧に行ったことにより、当該分野の今後の発展に資する方法論の進展に寄与したことが高い評価に値する。また、これまで抽象的理念に留まっていた「対話の質」や「学びの深さ」の概念を測定可能にしたことにより、英語ライティング指導に貢献する多くの示唆をもたらしたことは、新規性を持つとともに応用言語学上大きな意義を持つと判断した。第二に、本研究により文部科学省の「主体的・対話的で深い学び」という教育施策が、英語ライティングの分野で具現化し、教育効果に関する説明責任を果たすことを可能にしたと評価する。とりわけ、欧米から取り入れたアクティブ・ラーニングや「主体的・対話的で深い学び」の概念を、日本で研究と実践の中で操作可能にする価値を持つと考ええる。第三に、自律的な協同学習における教師の役割や生成 AI がこの先台頭してくる現在の教育の方向性について当該分野に多くの刺激と示唆を与える点に、本研究が応用言語学のみならず多方面に影響をもたらす可能性が期待される。

一方、問題点としては、協同学習の指向性を考察する上でその動態的な側面をつかみ切れていない、チャットを用いた学習の独自性が不鮮明である、チャットとコミュニティ・ボックスを利用する際の違いの説明に不十分さが残るなどの点が指摘された。このような問題は残されているものの、応用言語学研究の当該分野に大きな指針と影響を与える研究であることは明らかであり、本論文は学術的にも社会的にも高い意義を持つ。よって、審査委員会では本論文を、博士（学術）の学位を授与される資格があるものと判断した。